

「蝶の羽ばたき」

《登場人物》

有馬 翔（10）（30）

∴∴小学3年生の男子。

ショウ（30）

∴∴有馬の前に現れた男。正体は、とある未来線の有馬。

《有馬翔（30）とショウ（30）は、

同じ人をお願いします》

有馬 梨沙（34）∴∴有馬の母。

町長

住民 1

住民 2

同僚

《梗概》

有馬翔（10）は蝶を追いかけているうちに、「南海トラフ地震」が起きた未来に迷い込んでしまう。そこで出会った未来の有馬、ショウ（30）に未来を変えたければ「事前復興」が鍵だと教えられる。現代に戻った有馬が起こした行動は、どんどん広がっていき「事前復興計画書」が出来上がる。大人になっても有馬は、「バタフライエフェクト」にある嵐を起こす蝶の羽ばたきのように、人々をいつか起こる地震に向けて、動き続けている。

SE ドアが開く音

有馬「ただいまー！」

SE ランドセルを放り投げる音

有馬「行ってきまーす！」

梨沙「ちよっと、待ちなさい！」

有馬「何、お母さん？」

梨沙「どこに遊びに行くの？」

有馬「公園でアサギマダラ捕まえてくる！」

梨沙「アサギマダラ？」

有馬「知らないの？ 青い蝶々だよ。今ね、

徳島に飛んできてるんだって！ 他の蝶々

と違って、千キロも旅する『渡り蝶』でー

ー

梨沙「わかったわかった。三密にならないよ

うに、気を付けるのよ。はい、マスク」

SE 公園の騒めき

有馬「ここあたりにいるって、聞いたんだけどなくあ、いた！」

S E 有馬の走る音

有馬「待てー！」

有馬M「僕は無我夢中でアサギマダラを追いかけた……自分が今、どこを走っているか考えずに」

S E 走るのを止め、立ち止まる

有馬「……あれ、ここどこ？」

有馬M「迷った僕は歩いているうちに、町を見下ろす高台に出た。でも……」

S E 救急車や消防車のサイレン

有馬「なんだろう？ 何か町の様子が――」

S E 津波警報を告げる防災放送

有馬 「(恐怖で) な、何!？」

シヨウ 「——おい、お前。何でこんなところにいるんだ」

有馬 「え? ぼ、僕はアサギマダラを追いかけて」

シヨウ 「アサギマダラ? ……ああ、確かそうだったな」

有馬 「おじさん。ここは、どこ?」

シヨウ 「どこってお前が生まれ育った町だよ」

有馬 「そんなわけない! 僕の町は家も建物もこんな壊れてない……悲しい顔だった」

シヨウ 『南海トラフ地震』が来たんだ。それで皆、混乱して……このざま」

有馬 「その言い方はひどくない♡ 皆苦しんでるんだよ?」

シヨウ 「大地震が来ることは皆、わかってた——なのに、何も対策をしなかったんだよ。

俺たちは」

有馬「……どうして？」

シヨウ「大丈夫だって、過信してたんだ……  
ついてこい」

SE すすり泣く人たちの声

有馬「こんなにたくさん……あの袋には何が  
入っているの？」

シヨウ「死体だよ」

有馬「……え？」

シヨウ「人が集まった避難所で何が起きたと  
思う？ ウイルス性の感染症さ。皆、どん  
どん感染して行って……」

有馬「コロナ？」

シヨウ「コロナとは違うやつ……あの時、感  
染症の対策は学んだはずなのにな」

有馬「三密を避けるとか？ 確かに皆、マス  
クしてないね」

シヨウ「よく覚えてるな……ちなみに、あそ

こ……えつと、右から二番目の袋の中にいるのは、お前の母さんだ」

有馬「……うそだ」

シヨウ「嘘じゃない」

有馬「……そんな、お母さん」

シヨウ「せっかく地震から生き延びたのにな。やっという避難所がわかったと思ったら、もう死んでた」

有馬「どうして……どうしてこんなことに？」

僕たちはどうすればよかったの？」

シヨウ「そうだな……『バタフライエフェク

ト』って知ってるか？ ……知らない？」

蝶の羽ばたきが、遠い地で嵐を起こすんだ」

有馬「あんな小さな蝶々の羽ばたきで？」

シヨウ「それぐらい小さなことが、遠い未来では大きなことを起こすって意味なんだが……それを、お前が始めるんだ。こんな未来を引き起こさないように」

有馬「ここって、未来なの？」

シヨウ「今頃、気づいたか。そう、ここはお



前がいる『現在』から起こりうる未来の  
つだ」

有馬「じゃあ、この未来は変えることができ  
る？」

シヨウ「お前の頑張り次第だな」

有馬「なら、僕は何をしたらいいの？」

SE 津波の到達を告げる防災放送

シヨウ「残念ながら、そんなに時間はないみ  
たいだ」

有馬M「そう言ったおじさんの指に、アサギ  
マダラが止まった」

シヨウ「こいつは、時も渡る蝶だ。帰り方も  
簡単。来た時と同じように、後を追いか  
ければいい」

有馬「わかった。おじさん、ありがとう」

シヨウ「帰ったら『事前復興』って調べろ。

それがわかりやすい……俺にはできなかつ  
たことをやるんだ。有馬翔くん」

有馬「どうして、僕の名前を？」

シヨウ「お前のことは、よく知ってるよ……

よくね」

有馬「もしかして、おじさんって未来の……」

シヨウ「ほら、早く行け！」

SE 有馬の走る音

有馬M「しばらくして振り向くと、僕の知る

町は津波で流されて……僕は見失わないよ

う、必死にアサギマダラを追いかけた」

SE 公園の騒めきに、チャイム

有馬「（息切れ）……未来から、帰ってきて

た？」

SE ドアを開ける音

有馬「……た、だいま」

梨沙「お帰り〜蝶々、捕まえられた？」

有馬「お母さん」

梨沙「ん？」

有馬「うわあああ！（泣き始める）」

梨沙「あらあら。翔、どうしたの？」

有馬「（泣き続けている）」

有馬M「怖かった。あんな悲劇、絶対起こしたくない」

SE パソコンのキーボードを叩く音

梨沙「何、調べてるの？」

有馬「えっとね、『じぜんふっこう』について」

梨沙「へえ〜見せて……『大規模災害に備えて、生活の中にあるリスクを想定し≒地域づくり≒や≒被災後の復興の取り組み≒について考え、準備する』かあ」

有馬「やるって、約束したの」

梨沙「やけに真剣……避難準備とか、個人で

も出来ることがあるのね。東日本大震災のこともあったし、私たちもする？」

有馬「する！」

SE バッグに物をつめていく音。

梨沙「非常食に飲料水、懐中電灯にラジオは入れた……翔、あと何かあったっけ？」

有馬「母さん、マスク！ コロナの対策も」

梨沙「いけない、忘れてた」

SE 道路わき、車が走る音

有馬「お母さん、ここ危ないって」

町長「こんにちは。何をしているんだい？」

梨沙「あ、こんにちは」

有馬「ハザードマップを見てね、避難所への道を確認してるの！」

梨沙「こら、翔。挨拶しなさい！」

町長「いやいや、小さいのに立派だね。災害

への対策か……町長として私も見習うべき  
だな」

有馬 M 「僕の小さな活動は、どんどん広がっ  
ていった。僕から家族、家族から地域へ……  
……」

住民 1 「何か届いてる……『事前復興まちづ  
くりに関する住民意向調査』？」

住民 2 「アンケートみたいね。簡単そうだし、  
やってみましょう」

住民 1 「地震の発生自体は防ぎようないし、  
問題は起きたときにどうするかよね」

住民 2 「いいこと言うじゃない……あら、ワ  
ークショップもある」

住民 1 「行ってみようかしら」

有馬 「お母さん、僕たちも行こう！」

梨沙 「そうね」

有馬 M 「こうして徳島の……僕の町だけの

『事前復興計画書』が出来た。あの人――

未来の僕との約束はこれで果たせたのか  
な？ 小さな羽ばたきが大きな嵐へとなっ

た。でも、僕は――」

有馬（30） M 「俺は、まだまだ止める気はなかった」

SE 工事現場の音

有馬（30） M 「大人になった俺は、建設会社に入社した。そして、今取り組んでいるのは、公共施設を高台に移す計画だ」

同僚 「有馬さんの願い、叶いましたね」

有馬（30） 「一時はどうなるかと思いましたが、国の財政支援のおかげで、やっと移転ができます」

同僚 「これで、津波から病院を守れる……あ、あれは何でしょう？ 蝶？」

有馬（30） 「アサギマダラっていうんですよ……今年も来てくれたんだ」

同僚 「珍しい蝶ですね」

有馬（30） 「……『バタフライエフェクト』って知ってますか？」

同僚「小さな働きが大きな働きを起こすこと  
……ですよね」

有馬(30)「長い時間がかかりましたが……  
ここまでこれたのは、何かしらの小さな働  
きがあったから……小さなことでも動いて  
みるのが大切だと、俺は思っています」

同僚「私たちは蝶ですか……なら、止まっ  
てる暇はないですね」

有馬(30)「一匹の蝶として、災害から人を  
守る嵐でも起こしてやりましょう」

同僚「ええ……そろそろ、戻りますか」

SE 工事現場の音

有馬(30) M「いつか起こりうる未曾有の大  
災害。それに俺たちは、人との繋がりが作  
った同じく災害級の助け合いの嵐で立ち向  
かってやるのだ」

(終)